

立教大学
社会学部報

sociomagazine

特集

劇団四季俳優

道口瑞之さんインタビュー

社会学一年生傾向調査！

新任教員座談会

2号 2018

社会学部報 第二号

道口 瑞之さんインタビュー ……	2
食の堂にて ……	10
長 有紀枝先生インタビュー ……	14
新任教員座談会 ……	23
となりのフリーペーパー ……	30
卒業したら何するの? ……	34
社会学部一年生傾向調査 ……	37
先生の好きな○○の話 ……	38
社学生に聞いてみた ……	42
留学生コラム ……	44
癒し空間 ……	46
社会学部ゼミ紹介 ……	47
専門教育科目1の紹介 ……	62
助教座談会 ……	67
編集部だより ……	78

兼任教員インタビュ

おさ

ゆきえ

長有紀枝

立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科・
立教大学社会学部教授



社会学部には、「兼任」と呼ばれる先生がいらっしやる。学内の他の学部や研究科にも所属していらして、社会学内でゼミは持っておられない先生たちのことだ。今回は、ゼミ紹介では扱いきれない「兼任」の先生の中から、ジェノサイドや人間の安全保障という、社会学部においては稀有な分野に専門を持たれ、認定NPO法人「難民を助ける会」(AAR)の理事長も務める長有紀枝(おさ・ゆきえ)先生にお話を伺った。

——最初に、高校時代のエピソードを教えてください。

私の通っていた県立高校は元男子校で、一クラスに五、六人と女子は少数でした。中学時代、バスケットボールをしていたので、高校でも当然のように運動部を考えたのですが、女子部があるのはハンドボールかテニスくらいでした。どちらも嫌で、結局足が早かったのを活かそうと、男女を問わない陸上部に入りました。自分では短距離に自信があったのですが、ある日顧問の先生から「お前は投てき向きだ」と言われ円盤と砲丸に転向したんです。最初はいやいやでした。でも円盤では地区大会を勝ち抜き、県大会まで行きましたよ。

それには「強豪の女子高の修学旅行が予選会と重なり、彼らが出られなかったから」という棚ぼたの理由があったんですが(笑)。で、そんなこんなで受験勉強はかなり出遅れ浪

人しまして……。

——その後晴れて大学生になられたわけですが、学部生の頃はどんな学生だったのですか？

早稲田大学政治経済学部政治学科に進学したんですが、これは高校時代に読んだ芥川賞作家の庄司薫さんの『赤頭巾ちゃん気をつけて』がきっかけでしたね。入学直後は、体育会も検討したのですが結局、政治経済攻究会という研究サークルに入り、先輩とともに原典を読んだりしていました。そんな中、学内でたまたま交換留学生募集の張り紙を見つけたんです。その時は海外旅行どころか、パスポートも持ってない状況だったのですが、なぜか「行かなきゃ」みたいな使命感が湧き応募しました。留学先はインディアナ州のデューボア(Dubuque)大学です。行かせてくれた両親には感謝ですね。行く前と行ったあとでは大きく世界の見方が変わりました。現地で受けた差別をきっかけに民族問題に、とても関心を持つようになりました。

——差別があったのですね。差し支えなければどのようなことがあったか教えていただけませんか？

今から思えば、共和党支持者の多いインディアナ州でしたからね。トランプ大統領の選挙では、ものすごく差別的なことを言う有権者がニュースに出ていたと思いますが、私にとつてあれは不思議でもなんでもなくて、まさにデジャブでした。留学時代に日々接していましたから。一番仲のよかったスリランカからの留学生は、白人のルームメイトが、彼女の顔を見た途端に部屋を出ていき、一晩たりとも同じ部屋で過ごすことはありませんでした。白人のその子にとつても、肌が褐色のルームメイトというのはショックだったでしょう。社会階層的には、「アッパーミドル」と呼ばれる大学で白人が学生の九十五%を占めていましたから。ホストファミリーが熱心なカトリック教徒で、日曜日に一緒に教会に行つたことがあります。そうすると前の人まではニコニコ挨拶をしていた神父さんが、私の番になると能面のように目も合わせてくれないなんてこともありました。こんなにあからさまなんだと思いました。

また、同じ差別という枠組みでいうと、現地で先住民である、アメリカ・インディアンのことについても学んだんですね。母校の交換留学のプログラムでは最初の一ヶ月は参加者全員でミネソタ大学を会場にオリエンテーションを受けたのですが、すぐ近くにインディアンの居留地がありましたし、

帰国前にはグレイハウンド・バスで一人旅をして、ナバホやホピ、プエブロなどの居留地を巡ってみました。知的な意味ではかなりインディアン一色になって、「先住民について勉強がしたい！」と強く思ってた。でも帰ってきてすぐに差別についての自分の誤りに気づいたというか。日本にも同じ差別があるじゃないかと。行く前からもちろん知ってはいたけれども、自分が差別される側になるまで、その深刻さに気づかなかった。自分はあまりに無知だったということに気づいて二重にショックを受けました。カルチャーショックと同時にリバースカルチャーショックにも晒された二十代の前半でした。それが大学院に行きたいというモチベーションにもなりましたね。

——大学院に行く前に一度就職をされているそうですね。その時のエピソードを教えてください。

大学院にはすぐに行きたかったのですが、浪人と下宿生活と留学とで、親の脛をしゃぶり尽くしていたこともあって、これ以上、親は頼れない。そこで、とりあえず一度就職をしてお金を貯めてから大学院に戻れたらいいなという風に考えたんです。それで高給に違いないと就職したのが外資系の銀行だったんですけど、それも浅はかです……。留学経験を

強みに英語を使える職場ということで選んだのですが、新人がいきなり沢山のお給料を貰えるはずもなく。社会人となり一人暮らしの家賃も自分で賄うようになったら貯金なんて全然できないどころか、ギリギリの生活だということに気づいたんです。だったらもう借金して大学院に行ってしまうと思って(笑)。なまじ職場の人間関係が良くて居心地が良かったのと、目の前のことに一生懸命になる性格もあって、「私はこのままではここに居ついてしまう」と焦りもあって結局一年で退職したんです。今、自分が難民を助ける会(AAR)というNGOの理事長をしていてわかりませんが、人を育てるというのは手間とお金のかかることなので、本当に会社には悪いことをしたと思うところがあります。

そんな短い銀行員生活の中では、一度大きな失敗をしたんです。ある法人のお客様に返すはずの書類を誤って別の会社に送ってしまった。金銭面の損害はなかったのですが、信頼や守秘義務という意味では大きなことで。その時、当時とても怖かった上司が、初めて聞くような声と態度で謝っておられる姿を見て、「私はとんでもないことをしてしまったんだ」と思いました。私、それ以来間違えないんです。というか、とにかく見直しをします。論文でもそうだし、ちよつとした文章でも、誤字脱字や数詞もチェックしています。そこには

あの失敗で血の気が引いた時の経験があるかな。自分のミスで人様にもとんでもなく迷惑がかかってしまうんだということとを社会人一年目で身を以て学べたのは、大きかったと思います。

——大学院に戻ってこられてからはどのような研究をされていたんですか？

頭の中はインディアン一色で、世界の先住民全てを研究しようぐらいに思っていたんです（笑）。でもその前に日本の先住民を知らないでどうするんだと思い、アイヌの研究を始めました。アイヌの方が多く住んでいる二風谷でフィールドワークをしたり、アイヌ語講座を履修して弁論大会に出たりもしました。でもこれは最初の一步のつもりだったんです。しかし、始めてみたら最初の一步では済まなくなつて。修士論文自体がアイヌのことになりました。「現代日本のマイノリティ、アイヌ——その政治生活」というタイトルで、アイヌ系人口の多い市町村の議会選挙の投票行動の分析をしました。入りたくて入った大学院なので、自分の専門以外の講座やゼミも積極的に受講しました。政治思想史の藤原保信先生も学部生の頃から好きで、そのゼミにも参加していました。大学院の修了式の時に藤原先生がおっしゃった「アリストテ



レスの言う『善く生きる』とは何かを今一度考えてみて下さい」という言葉を今でも折に触れ思い出します。

色々思い出すことはありませんが、日本で初めてスワヒリ語辞典を作った西江雅之先生との思い出が鮮明です。とにかく先生の講義に夢中でした。何曜日かに西江先生の授業が学部・大学院と集中していて、私の中では西江DAYでした（笑）。

雑談・冗談を含め、先生がおっしゃること全てを必死でノートに鉛筆で殴り書きして、家に帰ったら万年筆で清書するみたいなことをしていました。そのノートは今でも残っています。西江先生から学んだ白黒をつけない考え方も、私の人生の中では大きいものになりました。

この頃には傷つく経験もありました。インタビューの折に、アイヌの人に「あなたたちは私たちを利用している。どうせ自分のために研究しているんだろう」と言われた時です。帰京して、西江先生に半べそで泣きついたら、「なぜ『その通りです』って言わないの？ 研究なんて自分のため以外に何があるの？」って言われました。今ならわかりますが、当時は「えーっ」て思いました（笑）。だから難民を助ける会で難民支援の現場に入ってニーズ調査の折に「必ず物資持つて戻ってきますからね」と約束をして、実際にそれを果たした時はやはり嬉しかったですね。

——修士課程を出られたあとにはすぐに難民を助ける会（AAR）に入られたんですか？

修士を出たあと、奨学金以外に学費の借金があったので、もう一度外資系の企業に就職しました。働きながら、先住民

の支援ができる国際機関を探していた時に、難民を助ける会との出会いがありました。当時お話を聞いた外務省の方が、「先住民専門の分野で求人はないので、日本にもNGOが沢山あるから、そういうところでまずボランティアをしてみたら」といくつか名前をあげてくれたNGOの一つが難民を助ける会でした。ちょうどその話を聞く数日前に、新聞で、難民を助ける会主催の、インドシナ難民の運動会の記事を読ん で切り抜きをしていたり、読んだ本の中に難民を助ける会のこと書いてあったり。「その団体だったら知ってる」と思っ て訪ねたんです。

最初は週末と平日の夜の何日かに、日本にいるインドシナ難民の受験勉強のお手伝いをするようになりました。大学院時代は学習塾でアルバイトしていたのでお手の物でしたね。

しばらくボランティアをしていたのですが「いっそ職員になる？」って言われまして。お給料として提示されたのは、当時働いていた外資系の企業の三分の一ぐらいの額でしたが、お金の問題ではないとNGOの世界に入りました。ちょうど一九九〇年代で、カンボジアの和平、クルド難民、旧ユーゴスラヴィアの問題と立て続けに起こった時代でしたから、NGOを通じた国際協力にとっぷり浸かっていきました。

——AAR時代にはノーベル平和賞も受賞した「地雷禁止国

際キャンペーン（ICBL）」でも活動されたと伺っています。対人地雷禁止条約策定までの運動にも携われたようですが、どのような経緯で始められたんですか？

最初から地雷問題をやろうと思っていたわけじゃないんです。きっかけはタイ・カンボジア国境の難民キャンプで障がい者の支援を行っていた時に出会った、たくさんの方足のない人たちが、単なる紛争犠牲者ではなく、地雷の被害者だと知ったことです。ICBLは世界九〇カ国以上の千を超えるNGOの、対人地雷廃絶のためのネットワーク組織ですが、その創設メンバーが、地雷問題に取り組み始めたのもこの頃です。はじめは「政治に関わらない人道的な活動こそが自分たちNGOのアイデンティティなのに、軍事や兵器にかかわるなんてとんでもない」という意見も多くあった中、被害が増えていく実態を見て、「地雷問題は、政治や軍事の問題ではなくてNGOが関わるべき人道問題なんだ」という認識が変わっていったんです。AARでも、私がカンボジアに駐在していた同僚とともに地雷問題に取り組もうと提案したのは一九九三年頃だったんですけど、その時は「三十八度線のように地雷で平和が保たれている場所もある」と組織の反対にありました。その後私は旧ユーゴスラヴィアに赴任してしまいましたが、何か、地雷問題とカンボジアを置き去り

にしてしまったみたいな思いがずっとあったんです。でも紛争が終結し、やっと平和が来たはずのボスニアでも人々が日常生活に戻る中で戦時中に埋められた地雷の被害にあう子供たちなどが続出しました。「カンボジアだけじゃなくてボスニアも地雷原になっているんだ」と気づいて、絶対にこの課題に取り組まなければと改めて思い、日本に戻っても一度掛け合ったら、今度は地雷問題の世界的な認知も上がって、組織として「ぜひ取り組もう」となったんです。

活動を通して色んな出会いがありました。影響を受けた「人生の師匠」みたいな人もいます。除去や被害者支援の専門家、被害者というより「サバイバー」、政治的キャンペーンの間とも親しくなりました。地雷廃絶とともに進めた有志国の政府の方々も、ICBLにとっては大切な仲間です。今は、核兵器禁止条約交渉の中心におられるオーストリアの軍縮大使トーマス・ハイノツチ氏もお仲間で、ICBLメンバーとともに関係者が招かれたノーベル平和賞の授賞式でも一緒にしました。

ノーベル平和賞の授賞式ほど、洗練された式典を私はしりません。まずノルウェーの王族が入場し、おとぎ話の世界のようにラッパの演奏から始まりました。司会はおらず、来賓挨拶もなく。司会の代わりに、ピアノやバイオリンの生演奏、

ソプラノ独唱など音楽が入るんです。その荘厳さや洗練さからは、「政治的だ」と時に批判されながらも、自分たちの人権意識で活動を続けているノーベル平和賞委員会の矜持を見たいと思いました。

この年一九九七年のノーベル平和賞は、地雷禁止国際キャンペーン（ICBL）のコーディネーターであるジョディ・ウィリアムズさんとICBLの共同受賞で、受賞スピーチはジョディと、ICBLを代表して、私の「地雷の師匠」でもあるレイ・マグラスさんが行いました。ここで彼は数週間前、アンゴラで、取扱防止機能付き対戦車地雷で、除去作業中に亡くなった除去要員の話をしました。地雷禁止条約は、対人地雷は禁止しましたが、特定の装置がついているために、対人地雷と同じように人を殺傷する対車両地雷については対象とはしませんでした。除去用の金属探知機の磁場に反応して爆発する機能（アンチハンドリング・デイス）付きの対車両地雷のことです。「対車両地雷に関しては、たとえ人に被害を及ぼす恐れがあろうとも、条約では対象としない」という条約交渉中心組の妥協的な方針がなければ条約は成立しなかつたけれど、しかしその妥協は現場で除去をしている人たちから見たら命にかかわる重大事でした。彼はスピーチでこのことを言ったわけです。しかし、物事は完璧じゃないんですね。この条約で救われる命がある。条約は、はじめの一

歩でした。

そもそもこのキャンペーン、活動中から内部で常に対立もありました。それこそ除去や被害者支援など現場組のNGOと、会議室での条約交渉中心のNGO、アメリカのNGOとヨーロッパのNGO、何でもかんでも南北問題にしたがるフリカのメンバーとか、英語圏とフランス語圏の対立とか。あらゆる対立がある中で、誰かが腹をたて、席を立てて出ていこうとすると「ちよつと待って、今そんなことしてる場合？」って言うてくれたのがクエーカー教徒の団体の方です。話し合いで分裂しそうになると「ちよつと待った！」って映画のセリフみたいにいふんですよ。「今この瞬間でも地雷原では地雷の犠牲になっている人たちが出ているのに、我々は何のためにここにいるの？先に進むためじゃないの？」って。そうするとみんな原点に立ち戻って。条約交渉の過程では、ICBLの仲間から大事なことを学びました。

——今は、NGOでの実務家としての活動と、大学の先生・研究者としての活動という「二足の草鞋」を履かれているわけですが、大学の先生になられたきっかけなどはありませんか？

修士課程を終えてすぐ、実務の世界に入りましたが、世界

の先住民の研究がしたいと思った修士時代の記憶は鮮明で研究者への思いはずっと持っていたように思います。そんなベースがある中で、出張が多い十三年のAARでの生活で、一度燃え尽きたんです。当時から、いくつかの大学で非常勤講師として教えたり、シンポジウムや講演会にスピーカーとして呼ばれたりする機会も多かったのですが、いつもそこで勉強不足や居心地の悪さを感じていたんですね。買った本はたまる一方で、読む暇もなかったこともあり、もう一度、学び直したいという思いがつのつていました。そんな中でたま人間の安全保障に関するシンポジウムのお手伝いをしたのですが、ちょうど駒場（東京大学大学院総合文化研究科）にそのプログラムができて、博士課程からでも若干名募集しているのを知りました。そこで再び大学に戻ったのが直接のきっかけです。ボスニア紛争末期にスレブレニツァで発生した虐殺事件をとりあげて博士論文を書きました。先住民からテーマは変わりましたが、人間の安全保障やジェノサイド予防など、研究者としてもやっていきたいと思っていた時に、たまたま声をかけてくださったのが立教の21世紀社会デザイン研究科の先生だったんです。社会学部への配属は、後から決まったものですが、専門外でもあり、当初は戸惑いました。しかし、着任後初めて持った「紛争と和解・共生」の授業の教え子がすぐ大学院に進学してきてくれたり、先住民研究の

阿部珠理先生にも出会えたりと、とてもご縁を感じました。

私の授業のテーマは社会学部生にとつては一期一会なんじゃないかなとも思います。あまり社会学部の他の授業では扱わないことなので。国連憲章なんて二度と読まないままの人もあるかもしれないですね。だからこそ、一回限りの出会いに終わらない何かが残るようにと、そういう思いを持って授業していますね。法学部で授業を持つこととの違いはそういうところにあるのかなって思います。

——研究者としての野望はありますか？

現在、過去、未来、という時間軸からみると、私の実務家としての仕事は、難民問題や地雷対策など、今「現在」生きている人の支援をすることです。研究者としては、紛争やジェノサイド（集団殺害）などの事件の「過去」と「未来」にかわりたいと思っています。それは、過去に起きた出来事を詳細に分析し、記録し、明らかにし、犠牲者や加害者の声を聞くことです。学生の皆さんにも、授業を通じ、何が起きたのかということ、最低限、犯罪や人権侵害やジェノサイドが起きたその事実を知ってもらいたいと思っています。そうした作業の積み重ねが、将来・未来の類似の事件の予防につな

がると思います。その意味で、実務家として、研究者として、というより人間として、こうした事件の過去・現在・未来にかかわりたいと思っています。

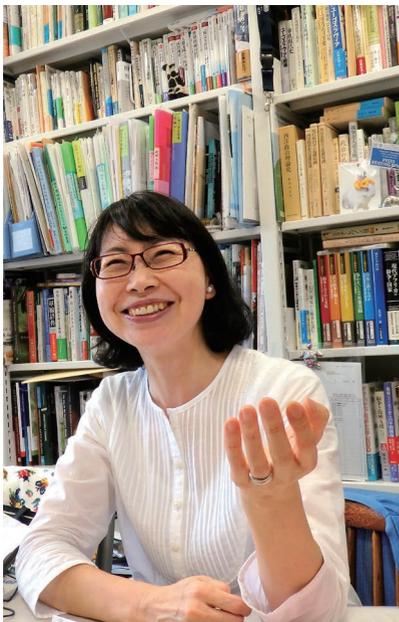
——最後に、学生にメッセージをお願いします。

一生のうちで一番まとまって勉強できるのはやはり大学時代です。専門家はウヨウヨいるし、図書館も使い放題だし。ただ、学生の時には、それがいかに貴重なことかを、なかなか気づかないんですね。でも、何とかしてそれに気づいてほしいと思います。学ばなければ、人は、今自分が居るところにしか居られないけれども、学ぶことによってどこまででも世界は広がります。ぜひ世界を広げてほしいと思います。だからって「世界にはばたけ!」って言いたいわけじゃなくて(笑)。世界を広げることで今ここにあり生活や人生も違って見えてくるかもしれないし、輝き出すかもしれない。大学生活では、自分が求めたものしか返ってこないんですよ。変な言い方なんですが、大切なことや重要な知恵や知識が降ってきてても、聞く耳がないと、あるいは自分がそれを欲していないと、聞き流してしまう。人生に決定的な意味を持つ、人や知識との出会いは誰にでも平等に訪れると思います。その「出会い」を「出会い」だと思えるかどうか。そのときの、

その人の心の持ちようによって、全く違うと思うんですよ。ステイブ・ジョブズの「Connecting The Dots」の話にもありますが、人生は全てが選択の連続なんだけれど、その選択は最短距離でどこかに到達するために、計算的に選べるものではない。振り返ってはじめて、あの点とこの点がつながって、今があるとわかる。何かしたいと思った時、最短距離を目指すのではなく、目の前のことに一生懸命になること、目の前の人に誠意を尽くすというのが何かにとどり着く一番の近道になるんじゃないかなとも思います。

——ありがとうございました。

(取材・編集 大澤 崇仁、服部 莉奈)



社会学部報 第二号 2018

2019年2月12日

編集長 伊藤 元彦

取材・執筆 入江 美穂
江村 知子
大澤 崇仁
近藤 綱紀
戸川 凜葉
外村 りの
永井 大貴
服部 莉奈
日出 恵輔
松本 和花子
丸尾 葉那
吉原 優人
渡邊 ひなの
渡邊 理紗子
(五十音順)

印刷 望月印刷株式会社

〒171-8501
東京都豊島区西池袋 3-34-1
立教大学社会学部
学部報編集委員会 監修



立教大学

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1